

二〇一六年 四国 自転車の旅

酪農家 吉川友二

小学生の頃、前輪と後輪にバツクを付けた旅をするための自転車をカタログで飽きずに眺めていた。それは旅に対する憧れよりも、かっこいい自転車に対する憧れだった。旅は当時の自分の生活からはあまりにもかけ離れていて、憧れの対象にさえならなかった。

仕事と小さい子供四人の子育てでスポーツとは縁のない生活をしてきた。長男が小学校二年生になった六年前に自分の自転車を買って乗り始めた。それから自転車で足寄を旅している人を見かけると、こんなことをしてみたいと家族や仲間と言っていた。酪農の仕事を引退したら、自転車で日本一周の旅に出ようと思っていた。そしてある日、気が付いた。今からやればいいのだ。今でしょ。

二〇一二年も年の暮れ、妻の友人が子供四人を連れて遊びに来ていた。会話の中で彼女が、バツク旅行なら家族旅行もそれほど費用がかからないと言った。その場で旅行代理店に電話をして聞くと、一週間前であれば、バツク旅行の予約ができるという。その日の夕方に帯広の旅行代理店に行き、二〇一三年の新年に四年生の長男と二人で沖縄の地に立った。沖縄一周で日本一周の幕が切っ

て落とされた。

二〇一四年の新年は長男と三つ下の次男と三人で福岡から長崎経由で鹿児島までの旅。二〇一五年の新年は小学一年生の三男も含めて四人で福岡から大分経由で鹿児島まで旅をして、二年で九州を一周した。

二〇一六年 四国の旅

旅の二か月くらい前から、『るるぶ四国』という旅の情報誌を買って、その地図を壁に張った。中学生となった長男は残念ながら自転車の旅を卒業して、今回は四年生と二年生の息子と三人が自転車組、妻と長男と娘は車組となった。

壁に張られた地図を見て、五日間で四国を一周するのは無理そうなので、香川の高松から高知経由で愛媛の松山までの旅とした。足摺岬と佐多岬も無理そうである。

高松空港からホテルへ向かうバスから見ると、雪のない風景が新鮮である。翌日は、自転車をホテルに置いて家族みんなで観光をする。琴電琴平線の一番前に座って、運転士のいる先頭の窓から讃岐の景色をのんびりと楽しむ。金毘羅さんの奥の院まで続く石段を登って明日からの自転車の足慣らしをする。足寄の山から出てきた私たちにとっては金毘羅さんの人ごみが観光気分を盛り上げ

てくれる。

帰りはJRに乗って、弘法大師の生まれた普通寺を夕暮れ近くにお参りする。お遍路さんの回る八十八カ所のお寺には番号が付けられていて、場所を教える時に地元の人が何番の近くですと教えてくれた。普通寺は第七十五番である。

自転車の旅の良いところは、その土地を五感で味わえることだ。目的地よりも移動の時間が長いので、移動が目的になり、移動を楽しむことになる。四国道のりのほとんどは田舎の景色であり、人の手の入った里山、里海、つまりそこに住む人の魂と自然との合作を味わうことができる。

自転車の旅の一日はだいたいこんな風である。旅の間はテントに泊まる。五時に起きて前日の夜に炊いて保温しておいたご飯を食べる。テントをたたんで出発するのは6時頃になる。まだ真っ暗である。行動中はほとんど全てのコンビニで休憩をする。だいたい三十分おきになる。しかしコンビニに寄っても、食べ残した朝ごはんを食べ終わるまでは、おやつは買わないというルールがある。四国へ来ても全国共通でかわり映えのないコンビニ。観光に力を入れるなら、何か工夫が必要だ。国道沿にある地元商店は今や絶滅危惧種である。昼ごはんは晩

ごはんは食堂で食べるか、お弁当を買う。夜はだいたい八時に寝袋に入って寝る。シンプルな毎日だ。

四国の旅では、一日に一度は、八十八カ所の中のお寺をお参りする、一回は地元の資料館に立ち寄って見学をするようにした。一日に走る距離は百二、三十キロである。自転車をただこぐという単調さから、子供たちが飽きてしまうのだが、今回は二年生と四年生の息子たちから文句が一つも出なかった。ちょうど良いペースで走れたからだろう。テントを張る場所に早く着けば遊ぶことができるが、遊ぶ時間の余裕がなかった。持って行った釣り竿は使わずじまいだった。

四国の道はお遍路さんが道路脇を歩くことを配慮してつくられている。センサーで人が歩くにしたがつて明かりが点くトンネルもあった。そして車の運転手も人に気を付けて走ってくれていて、道の脇を自転車で走っていても安心感があった。四国の旅は同行二人（どうぎょうにん）。その安心感は常に弘法大師と一緒に旅だからだろうか。

余談になるが、ラジオで西洋人が「西洋人は個人主義で、信仰がなければ一人で生きなくてはならない。日本人はお仏壇に手を合わせて、亡くなったご先祖様と共に生きていてうらやましい」と言っているのを聞いた。なるほど、それから毎朝お仏壇に手を合わせる時に、今

日も一緒に生きようねと、愛する亡き家族に語りかけるようになった。

これも余談だが、毎朝神棚に手を合わせる時は「天之御中主（あめのみなかぬし）さま お助けいただきまして ありがとうございます」と唱えている。斎藤一人さんの『神様に上手に助けてもらう方法』KKロングセラーズ。宗教書ではありません。

自転車の旅の初日

高松のホテルをまだ暗いうちに出発する。早朝で人影もまばらな志度寺（第八十六番）でお参りをする。納経所のストーブで温まらせていただく。

ニュージールランドで知り合った徳島の知人と「びんび屋（「びんび」とは地元の言葉で魚）」で待ち合わせる。二十年振りの再会を祝す。昼食をご馳走になり、鳴門大橋まで車に乗せてもらって、名高い渦潮を見る。

徳島の町を素通りしたところから暗くなってくる。子供たちも不安になってきて「どこで泊まるの？」と繰り返して聞いてくる。テントを張る適当な場所を見つけたのが、自転車旅の難題である。沖縄ではお墓の敷地に張ったことがある。

真っ暗になってもかなり走り、那賀川の道の駅（公方の郷なかがわ）にたどり着く。道の駅で泊まるのはルー

ル違反かな？と、国道から1km位海へ離れた所にある野鳥公園へ行くことにする。畑の中の小道があまりにも狭いので心細くなる。公園は門が閉まっており、トイレも水もなく、子供たちと話し合い、道の駅でも仕方がないと引き返す。帰りも道に迷いそうになる。

道の駅の裏にある芝生にテントを張る。夕食は交差点の筋向いのコンビニの弁当をテントで食べた。トイレも水もあり、道の駅が快適だったので、次の日から子供たちは道の駅で泊まろうと、道の駅を目指して頑張ることになる。

今回の旅は道の駅に泊まると決めたので、テントを張る場所をどこにしようかという不安もなく、暗くなるまで走ることができた。しかし、泊まる場所が決まっていないドキドキ感も旅の楽しみだ。

旅はキャンプをする楽しみもある。理想のキャンプ場は、水とトイレがあつて、温泉があつて、たき火ができて、釣りができて、ときりがない。テントは薄い布を通して自然の鼓動が感じられるところが素晴らしい。

二日目

第二十三番の薬王寺は屋台が出ていたり、観光バスも何台も来ていたりして、ずいぶん賑やかであった。善通寺をのぞいて他のお寺はどこも、二、三組のお遍路さ

んだけで閑静であった。

いくつかの峠を越えて「ようこそ高知県」の看板と出会った。私が「ようこそ高知県」と声に出すと、三男は「ハロー」と答えた。

室戸岬のすぐ手前にある御厨人窟（みくろど）は若き空海さんが悟りを開いた所だ。観光地化されているかと思っていたが、ひっそりとしていた。

室戸岬にある第二十四番の最御崎寺（ほつみさきじ）は地図では道から近くのように見える。岬を過ぎてすぐ板がある。お寺を目指して道を右へ折れると、信じられないくらい急傾斜の上りで、子供がすぐに、「止めようか」と言う。私が行こうと言う。自転車を必死でこぐが大変なので、私「止めようか」と言うと、今度は子供が行こうと言う。

わざわざ苦労してまで、なんでこんな崖の上にお寺を建てるのか。まずは道から切り開かなければならない。信仰とは、あえて困難を求めることなのか。徳島からの道すがら、こちらお遍路道という矢印をいくつか見た。舗装道路を自転車で行くのでさえ大変なのに、わざわざ険しい道を教えてあげなくても……。

室戸の町を走るころには暗くなってくる。道行く人に、食堂がないかと聞くと、この先にはコンビニも食堂もな

いというので、引き返す。子供たちが腹減った、どこでも一番近いところがいいと言う。ここは居酒屋かなと思っ
て通り過ぎた小さな暖簾の掛けてあるお店に入る。ご夫婦と娘さん（？）三人で働いている。頑張ったご褒美に、なんでも好きなものを頼んでよいことにする。次男は、牛タンと焼きおにぎり。三男は親子丼とカキフライ。私は握り寿司。お寿司のネタは悪いが厚みがあつて大きい。さすがは港町のお寿司である。お店を出る時には食べきれなかった焼きおにぎりを折詰にしてくれておしんこまでつけてくれる。また来たくなるお店があると心の中が暖かくなる。思い出すたびにお店の人の心の温かさが伝わってくるからだ。

そのお店からキラメッセ室戸という道の駅まで真っ暗の中もうひと踏ん張りする。

三日目

高知へ向かう途中でサイクリングロードの看板を子供が見つけて入ってみる。鉄道の跡地なのだろうか？ ちょうど線路位の幅の道だ。途中で狭いトンネルもあった。兄弟で競争を始めた時、子どもたちが大声を上げてはしゃいでいるのを見ていて、今まで車道を走っている時にはかなり緊張していたのだなと思う。

高知の町の手前にある、一番道から近そうな禅師峰寺

(第三十二番)に寄る。標識を曲がって数百メートル行くと、急な丘(山?)が現れ、お寺に登る山道と車道の両方がある。最御崎寺の経験から、自転車を置いて歩いて山道を登ることにする。最御崎寺といい、なんでまたこんな大変なところを選んでお寺をつくるのだろうか?

桂浜の坂本龍馬記念館へいく。次男は竜馬の漫画を読んでいるはずだ。展示資料を読む私を子供たちが急かして、ビデオを見たがる子供たちを時計を気にして私が急かして記念館を出る。

子供たちを急かして記念館を出たのは良いが、道を間違えて桂浜まで急な坂道を降りてしまう。同じ坂道を上り返しながら子供たちに、道を間違えたことを謝ると、二人とも平気な様子で、そんなことは気にするなよ、と予想外の返事。急坂を立ちこぎで上るのも楽しそうだ。

しばらく行くと浦ノ内湾の静かな海の風景が広がる。道端に見つけた公園の芝生でテントを張って一日くらいのおんびりと釣りでもしようかと、迷



いながら走る。四時である。迷いながら走りすぎてしまふ。車もあまり通らない一車線の細い道が続いていく。浦ノ内湾を過ぎて峠を越えると何もなかったところに巨大なコンクリート(?)工場が現れる。しばらくいくと幹線道路に出る。突然に大量量販店が並び、車のライトが川のように流れている。SF映画の未来都市に迷い込んだようだ。

光の流れの中を走って道の駅「かわうその里すさき」に着くと七時になるところ。道の駅は閉まっていて誰もいない。無人の道の駅の二階にあるレストランは意外にも開いているがお客さんは誰もいない。須崎の町まで行って、美味しいお店を探さないと云うが、子供たちはここがいいと言う。

道の駅のトイレとすぐ上を走る高速道路に挟まれて、賑やかな一夜を過ごす。

四日目

岩本寺(第三十七番)は四万十川沿いの小さなひっそりとした町の中にあつた。どこにも登らずに行ける、どこにでもありそうなお寺だ。当たり前のお寺もあるのだ。寒い朝で、誰もいない納経所の玄関のストロブで手と足をあぶる。

ここから四万十川沿いの道を下流に向かって走る。こ

の日は一日中向かい風でひたすら体勢を低くして走る。体の軽い三男は特に大変そうだ。看板に四万十川の名前の由来の一説が書かれていた。アイヌ語の「枝分かれの多い」という意味の言葉からきているとあった。日本の地名は漢字は当て字だろうという意味不明な地名が結構多い。

まだ上流であるせいか、四万十川の水量も少ない。土手を降りて河原で朝ごはんの残りを食べて一休みをする。石を投げて水切りをしたり、向こう岸まで石を投げて届くか競争をしたりする。子供たちが遊ぶのには川さえあればいい。こうして仕事もなしで一日中子供たちと遊べる時間は貴重だ。

お昼ご飯は道の駅「四万十とおわ」で昼食バイキングを食べる。地元のお母さんたちがお料理から接客までをしている。二十種類ほどの地元のお料理が並び、大人千円、子供五百円だ。平日でお昼には遅い時間にも関わらずにほぼ満席で、合い席をして食べる。

北海道から来たというと、北海道は食べ物美味しいでしょうと言われる。我々に見れば、伝統ある地元のお料理がごちそうである。北海道にはブランド力があることを知る。

四万十川ともお別れをして、支流をさかのぼり愛媛県に入る。今日の目的地である道の駅「みま」には真つ暗

になる前に着く。道の駅の食堂はすでに閉まっかけていて、近くに食堂もないと言うので、お弁当を買って食べる。

五日目

朝真つ暗の中、雨が降っているのかと思ったら、雪が降っていた。出発するころにはありがたいことに雪はやむ。

出発してすぐの第四十二番の佛木寺（ぶつもくじ）をお参りする。道に面してすぐに山門がある。ヘッドライトを点けてのお参りを次男は怖がる。岩本寺といい佛木寺といい、裏に山があるのに平らなところにお寺を造っている。宗教は困難だけを求めているのではないらしい。まっすぐ進むと歯長（はなが）峠で、かなり急で大変そうである。左へ曲がると遠回りだが、それ程登らなくても峠を迂回できそうである。地図をじっとにらむ。次男は真つすぐがいいと言うが、左へと迂回する。急な山道を少し上ると、ブレーキを常にかけていなければならぬ急な下り坂である。狭い谷間が下までどこまでも伸びている。今更上り返す根性もなく、急な上りを恐れて直進しなかったことを何度も何度も悔やみながら坂を下っていく。

後日気が付いた教訓。「昔できた峠にはできた理由がある。簡単に迂回できるなら、そちらが峠になっている。

峠に向かつて直進すべし。」

谷あいにはポツンと家がある。それが谷に沿った家並になり、開けて水田に家が散らばる。沢の両側を見ると、転んだら下まで転げ落ちてしまうような斜面にミカン畑が広がっている。ニュージールランドで崖に放牧されている羊を見た時もこんなところも牧場にするのかと驚いたが、それ以上に驚いた。下草刈りもしているのだろうか、下草も青々としている。柵を張つて羊を放したらどうか。朝の通学で各バス停に一人、二人と小、中学生が立っている。彼らとあいさつをしながら走る。わざわざこんなに大変な所で農業の後を継ごうという子供はいるのだろうか。日本の農業、T P Pの問題はここを見ずして語れないと思った。ここであえて農業をして暮らしていくのは仕事に対する愛だろうか、地元に対する愛だろうか。これは信仰に近いかもしれない。愛媛のミカンは高くても買おうと思った。

幹線道路に出ると松山までの距離の標識がある。八十キロ位ではなかっただろうか。思ったよりも距離が短く子供たちはがぜんやる気が出たようだ。ルート選びの判断ミスで大変なことにならなくてよかった。最終日の今日は明るいうちにホテルに着きそうだ。遠回りをしたけれども、このミカン畑を見ることができてよかったと、判断ミスをした自分をなぐさめる。

雨が降り始める。道の脇のかまぼこの売店に避難する。売店のすぐ下にかまぼこ工場がある。開店したばかりの誰もいない売店で、お店のお母さんにちくわをサービスしてもらい、かまぼこを食べて合羽を着る。今日は自転車の旅の最終日で、服が濡れてもホテルにたどり着けば何とかなると雨でも気が楽である。

左手方向に見える海へ落ちていく急な斜面にミカン畑が広がっている。ミカン畑を斜めに横切つて道は登っていく。さつき下つたぶんだけ上らなくてはならない。ひたすら上りに感じるが、距離を見れば足寄の芽登坂の距離とたいして違いはないはずだ。足寄はスケールがでかいし、このミカン畑もスケールがでかい。

短いトンネルを何個か抜けて法華津トンネルを越えて下ると、齒長峠からの道と合流する。道は川に沿つて発達したのだろう。常に川を見ながら上りそして峠を越えてまた川を見ながら下るを繰り返しながら進んでいく。

冷たい雨も内子の手前で止む。内子の古い街並みを見学し始めると、次男が早く行こうと何度も真剣に催促をする。ホテルでテレビを見るのが楽しみなのだ（我が家にはテレビがない）。

松山の平野に出る手前の伊予中山の峠は路面こそは雪が融けているものの、道路わきにはまだ雪がうっすらと積もり、両側の山の斜面は雪景色である。

松山の平野に出ると、道が広く立派になり、お店や車でにぎやかになる。ちようど下校時間と重なり、高校生のママチャリと競争しながら走る。子供たちは地元小学生と顔を合わせるのが恥ずかしいので、いよいよスピードが出る。

丘の上に立派なお城が見える。目指すホテルは松山城のお堀の脇にある。松山城が丘の上のお城だとは知らなかったので、あれが松山城ですかと、ガソリンスタンドの人に聞いたら、あまりにも当然のことを聞いたせい、よく聞き取れなかったせいか、要領を得ない返事が返ってくる。まあ行ってみれば分かるでしょう。



旅から帰って

日本一周の達成感を得たいのか？旅路を楽しみたいのか？

四国は一度に一周してしまうのはもったいない。足摺岬と佐田（さだ）岬もカットしてしまっただ。

日本一周は運が良かったら達成できればよい、だめな来世でやればよいと考えるのが正解かもしれない。

旅から帰ると、妻が『四国八十八力所ゆとり旅』というガイド本を買って持っていた。同行二人という言葉は知っていたが、本を読んでもみると、これは巡拝の心構えの「三信条」の一つだそうだ。「撰取不捨のご誓願を信じ、同行二人の信仰に励む」とは「弘法大師は我々を決して見捨てないということを感じ、信仰すること。」であるらしい。

次の信条は「何事も修行と心得て、愚痴、妄言を慎む」である。

もう一つの信条は「現世利益の靈験を信じ、八十八使の煩惱を消滅させる」である。「現世利益とはこの世で受ける「仏の恵み」のことである。」そうだ。現世利益は息を止めて一分もすればわかる。「ああ、空気があったて幸せ、仏さまありがとう」。修行もしていると思うと辛い、修行も仏の恵み、させて頂いていると思うと感謝に変わる。

煩惱と欲望は違うはずだ。欲望こそが人生の楽しみだ。不届き不埒なことを考えると元気になれる。煩惱を辞書で調べると「心を乱すすべての欲望」とある。欲望に心を乱されなければいいわけだ。

「こうありがたい」という仏さまが人間に付けてくれた

欲望が、「こうあらなければならぬ」という思い、「こ
うあるべきだ」という思いこみに変わってしまうと苦し
みになる。思い通りにいかない現実を「今のこのままの
状態が、仏の恵みによって与えられた最高の状態なのだ
」と感謝すれば、煩惱が消滅するのではないか。

二〇一六年版私の三信条

- 一、人に優しく、常に笑顔でいる
- 一、絶対肯定、すべてに感謝する
- 一、ふとどき、ふらちに生き活き（生活）と生きる

そんな心持で、毎日すべての良きことが、いのちの泉
から湧いてくるのを味わいたい。



ありがとう牧場
放牧の風景



チーズ・ヨーグルト



放牧牛乳 あしよろ道の駅にあります